

終戦　そして帰国まで

福岡市南区　清水　理子

昭和20年8月8日、私は旧満州（現在、中国東北地方）東満総省鶏寧の電信電話局に勤めていた。現黒龍江省、この街は毎月8の日は防空演習があるが、この日は飛行機は飛ばし、爆音は聞こえるし、『まるで実戦みたいね』と話していた。突然電話局の分厚い壁にも機銃掃射があり、ピュン、プスーッ、という音に、皆びっくりして机の下にもぐりこんだ。

暫くして電話がありソ連の参戦を知る。急遽避難することになり、『すぐには帰れないだろうから、なるべく冬物の衣類、乾パン、おにぎりなど1週間分ぐらい用意せよ』とのことだった。リュックサックを背負い、駅へと急いだ。無蓋車に乗り牡丹江へと向かうが、ここもすでに火の海、一路長春へと行く。線路の両側には老若男女をとわず、目玉がとび出したり手足のちぎれたりした死体が何体も転がっていた。

それでもなんとか8月15日昼すぎ長春へ着く。電話局へ行く途中の街のざわめき、旧日本軍の戦車4、5台がのろのろと走って行く中をただ黙々と歩いていった。何かがあったのではないかなと思ったが、戦争が終わったなんて考えもしなかった。電話局にはすでに奥地からの職員や家族たちが100人余り大広間に集っていた。そこで電話局の人から戦争の終わった事を初めて聞いた。今までの気力が抜けて坐りこんでしまった。あっちこっちからこの先どうしたらよいかと不安の声があがった。暫くして2、3人の電話局の職員が来る。退職金がわりに1人千円均等に渡された。

それから2、3日、5室ぐらいに分かれて生活した。毎日のようにソ連兵が来た。そのつどベルが鳴り、女子職員は地下室へ急いで逃げこんだ。ソ連兵は女はいないのかと言って帰ったそうだが、やはり入れかわりやって来た。

その後旧南満州鉄道官舎で、職員5人ずつで生活を始めた。いつ日本に帰れるかわからないので、治安のよい日本人住宅街へ友人と2人でお菓子、パンなどの行商に出かけた。よく売れた。

10月に入ると寒さもきびしくなり、官舎の前の道路を毎日、硬直した着のみ着のままの死体が馬車に3段に積み重ねられ日本人墓地へと運ばれていった。日一日と数が増え、またたく間に広い畑に墓標が立ち並んでいった。

10月も半ば過ぎると、外に出れば眉毛も凍った。ある日、突然人集めが始まり、男性は次々とシベリアに送られていった。私たちも寒さと生活のため友人たちと暖かい大連へ向かった。今度は旧日本軍の牛馬を運んでいた有蓋車、重い扉をあけ入ってみると、中国人、日本人でひしめきあっていた。もうすぐ大連という時、駅もない場所で急に列車が止まり、ソ連兵が何か聞いていたがすぐ発車した。日本人は乗っていないかと聞いたそうだ。

やっと大連へ着く。駅前には日本人居留民会の人々の出迎えで、50人ばかりの人たちと、

ときわ小学校へ行く。畳は表ゴザこそないがぎっしりと敷きつめられ、大きなストーブや布団、はだか電球まで用意してあった。居留民会の人たちの心づかいに、皆抱きあって喜んだ。教室を2室提供され、25人ずつに別れて生活を始める。奥地から逃げて来た人ばかりで、皆一致団結し、孤児老人などの働けない人の生活はみんなで見守ることにした。ところが2、3日たつと今までの疲れから私は風邪をひいて寝こんでしまった。ちょうどソ連の巡回医療団がやってきて即日、旧南満州鉄道病院へ入院。ベットに寝せてもらったまでは覚えている。それから30日余り意識不明のままだった。そんな状態の中、蒼々とした水が流れ、向こう岸で幼児が手招きしているが足が動かず、そのうち私の名を呼ぶ声が聞こえて目を覚ました。同室の人の話では、3回ぐらいだめと言われたが、先生が「どうせソ連に接収されるのだから」と、よい薬を惜しまず使って下さったとのこと。

それから1週間ほどで退院してみると、ときわ小学校で暮らしていた中年の男性が発疹チブスで亡くなっていた。

元気を回復した私は、友人の世話で日本人ばかりの糸繰り工場で働いた。慣れない仕事で苦勞したが、日本に帰るまではがんばるぞと思った。でも引揚げの話は一つもなく、長春あたりはボツボツ引揚げていると聞くとうらやましかった。

夏も過ぎて昭和21年の10月半ば、突然引揚げの話が持ちあがり、大連埠頭へ集合した。でも船はなかなか来ず、またたく間に1ヶ月は過ぎていった。海のそばなので寒さもきびしく、人々の心も自然と沈みがちになってきた。食べ物は埠頭の中まで売りに来るので心配なかったが、トイレに困った。広い海辺に穴を掘っただけ、ムシロ1枚のシキリ、これがいちばん辛かった。

12月半ば、待望の引揚船、高砂丸がやってきた。貨物船だった。乗船の際には時計、指輪、お金など持ってないかときびしいチェックがあり、降ろされる人もいた。ぶじ乗船できて、やっと日本に帰れると思うと涙がとめどなく出てきた。

3日かかり、入港する直前に5才ぐらいの男の子が息をひきとった。まだ体にぬくもりもあり、母親は「連れて行かせて下さい」と頼んでいたが、入港したら手続きも大変だし、「水葬させて下さい」と船員さんに言われ、汽笛「、ポー」という音と共にほうりこまれた。

佐世保に入港、下船の際係員から「ここは日本です、偽名を使っている人は本名を名乗って下さい」と言われた。私たちと暮らしていた若者2人が名乗り出た。元特務機関に勤めていた人だった。